



骨と関節をイメージした
整形外科アピールマーク

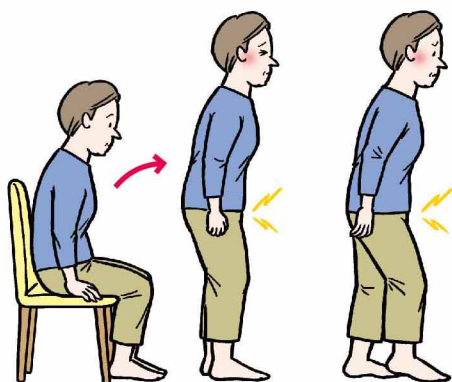
へん けい せい こ かん せつ しょう
変形性股関節症



「運動器の健康」世界運動
動く喜び 動ける幸せ

● **症状** ●

変形性股関節症の症状は、股関節の痛みと股関節機能の障害です。股関節は鼠径部(脚の付け根)にある骨盤と下肢をつないでいて、体重を支える重要な関節です。股関節症が進行すると、股関節の痛みが強くなり、歩行に障害を生じます。さらに進むと歩行する際だけでなく、持続痛(常に痛む)や夜間痛(夜寝ていても痛む)も出現してきます。痛みのため立ち仕事や台所仕事は困難となり、階段や車・バスの乗り降りも手すりが必要になります。一方日常生活では股関節の動く範囲(可動域)が制限されるため、足の爪切り、靴下履き、和式トイレ使用が難しくなります。



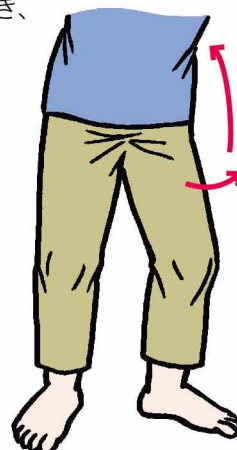
初期

立ち上がり、歩き始めに脚の付け根の痛みが生じ、歩いていると軽快してきます。



進行期

歩行時や動作中に痛みが強く、靴下履き、足の爪切り、正座や和式トイレなどが困難になります。

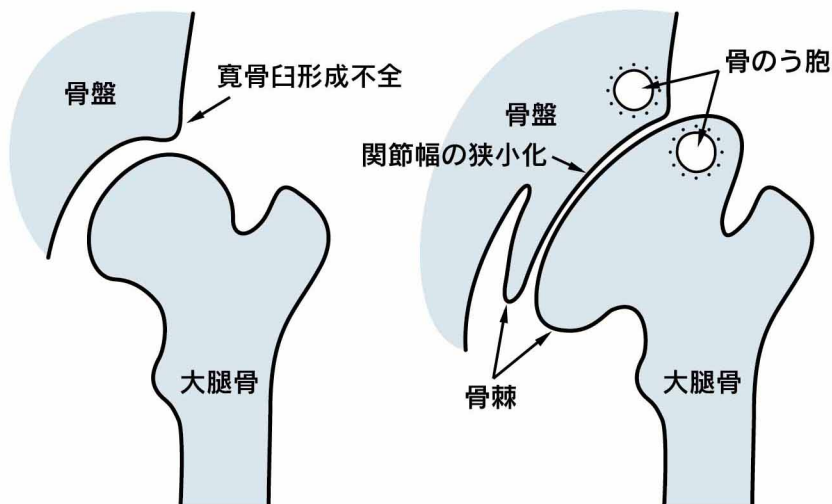


末期

足の付け根が伸びなくなり、膝頭が外を向くようになります。また、左右の足の長さも違ってきます。

● **原因・病態** ●

患者さんの多くは女性です。以前は我が国では発育性股関節形成不全の後遺症や寛骨臼形成不全など小児期の発育障害の後遺症が主な原因とされ、変形性股関節症の80%程度を占めると言われてきました。最近の高齢化社会の進行とともに、明らかな股関節疾患の既往が無くとも、年齢とともに股関節の軟骨が傷んで変形性股関節症を発症する方が増えてきています。



● 診断 ●

まず診察して股関節に関連した痛みや症状があるかを調べます。股関節の疼痛の誘発試験、関節可動域の診察により重症度も調べます。レントゲン(X線)検査も重要です。体重を支える部分が狭い状態である寛骨臼形成不全があるかどうかを評価します。寛骨臼形成不全があると将来的に股関節障害が進行しやすく注意が必要です。X線上の軟骨幅から軟骨のすり減り具合も評価します。軟骨の幅が減っていると変形性股関節症の進行が始まっています。進行するとX線上で棘(とげ)状の出っ張りである骨棘(こつきょく)や骨嚢胞(のうほう)と呼ばれる骨内の空洞など特有の像が見られます。補助診断としてMRIも有用です。関節内に水が溜まっていたり、軟骨の変性や障害が早期から診断できます。



正常股関節



寛骨臼形成不全



変形性股関節症

● 予防と治療 ●

加齢により傷んだ関節軟骨を若いときのように再生させることが理想ですが、現在はまだ研究段階です。変形性股関節症と診断されたら、関節の負担を減らしつつ大事に使いましょう。まずは手術以外の方法を試します。重量物作業などの股関節にかかる過度の負担は減らしましょう。痛みを減らすには痛み止めの薬や心理的抵抗がなければ杖の使用も有効です。筋肉が衰えるとさらに歩行状態が悪くなります。運動量をうまくコントロールした適度な歩行や筋力トレーニングが必要です。水泳、水中歩行がおすすめです。しかし疼痛が強い場合は運動療法そのものが困難となる場合があります。股関節の形状や症状によっては適切な時期に手術療法に切り替えたほうが良い場合もあります。整形外科医師の診察を受けて相談しましょう。

手術治療は骨を切って関節の形を有利な形に変える骨切り術と呼ばれる方法と股関節自体を人工物に変える人工股関節手術が主な手術です。骨切り術は寛骨臼形成不全が著しい例に対して関節軟骨の障害が軽度である初期のうちに手術が薦められる場合があります。社会復帰に一定の時間がかかるなどの問題があります。

股関節の破壊が進行し疼痛が著しい場合には人工股関節手術が選択されます。人工股関節手術は痛みを取る効果と機能改善効果は非常に優れています。手術手技改良や早期のリハビリ開始により、早期の社会復帰が可能となってきています。長年の問題であった人工股関節の耐用年数も飛躍的に改善しています。



寛骨臼の骨切り術



人工股関節全置換術